

令和 6 年度市民公開講座「海洋分野における働き方の未来」

開催報告

【開催日時】2024 年 12 月 15 日(日)10:30~12:30

【場所】長崎大学文教スカイホール

【参加者】121 名

【プログラム】

開会挨拶 門脇知子(長崎大学副学長・ダイバーシティ推進センター長)

第 1 部 水産業における働き方の現状と先進的な取り組み

「将来の水産業と地域活性化を担う人材育成」

広瀬美由紀

(水産学部 准教授／ながさき BLUE エコノミー 人材育成部門担当)

「水産業における働き方の現状」

松下吉樹(水産学部 教授)

「水産現場での多様な人材と働き方」

竹下千代太氏(株式会社天洋丸 代表取締役社長)

座長:吉田朝美(水産学部 准教授)

第 2 部 水産業における働き方の未来について考える

竹下千代太氏

荒川和美氏(長崎鶴洋高等学校 教諭)

松下吉樹

細田尚美(多文化社会学部)

広瀬美由紀

山本悠理(大学院 水産・環境科学総合研究科 博士前期課程 2 年)

座長:矢内琴江(ダイバーシティ推進センター 副センター長)

閉会挨拶 長富潔(日本水産学会九州支部 支部長)

【共催】日本水産学会九州支部

【後援】長崎県、長崎市、雲仙市、ながさき BLUE エコノミー

【備考】今年度の市民公開講座は、本学が令和 5 年度に採択された「国立大学経営改革促進事業」の一環で取り組んでいる「海洋イノベーション分野における『長崎大学ワークスタイルイノベーション』」として実施され、日本水産学会九州支部との共催で企画運営を行った。

【開催内容】

私たち人間社会は、これまで海の恩恵を受けてきた。しかし今日、海洋汚染、地球温暖化による海洋資源の枯渇といった地球規模の課題を抱えている。それに加えて、漁業の担い手不足問題も深刻である。労働の場としての漁業は、従来男性中心の環境であり、その改善に取り組むことは喫緊の課題である。本シンポジウムでは、海の豊かさを守りながら、私たちが生きていくためには、いまどのような未来を描くことができるのか、多様な専門分野・立場からの登壇者とともに、考えた。

第1部 水産業における働き方の現状と先進的な取り組み

まず広瀬美由紀准教授からは、本学が推進する「ながさき BLUE エコノミー」において取り組む水産人材育成プラットフォームの仕組みについて紹介がなされた。学生、企業・行政の若手を対象に、多面的・俯瞰的に課題を捉える力の育成を目指している。このプラットフォームでは連携している北海道大学、琉球大学、本学が、それぞれの特徴ある取り組みを活かした教育システムを構築している。現在、これら3大学の教育プログラム間で交流が行われている。また今後は、「サイエンスアイランド高島」を人材育成の拠点としていく計画である。



次に松下吉樹教授からは、DE&I の視点から水産業における働き方について講演がなされた。今日、米国水産学会では水産分野における DE&I が必須の課題として指摘されているが、日本の水産分野は後れをとっていることが指摘された。しかし、かつての漁村には多くの女性たちが漁業の担い手として働いていたことや、漁だけではない多様な仕事が存在していたことが紹介された。ところが現在の漁村のイメージは、学生たちに聞いてもネガティブなものが多い。また実際に、多様な人材の育成や受入れの環境が整っていない現場も多く存在する。政府は、農林水産業におけるダイバーシティ推進に着手しているものの、水産業への取り組みはまだ十分ではない。その一方で、水産業において活躍する外国人技能実習生の数は年々増加している現状がある。また他方では生産者側からの新たな試みが生まれている。長崎の丸徳水産では、女性生産者が中心になり、商品化されなかった“嫌われものの魚”から加工食品を作り出しており、環境問題に配慮した漁業が目指されている。これらを踏まえて松下教授は、多様な価値観をもつ人々が水産業に参画することで、これまで水産業が追求してきた、美味しさや新鮮さ、漁獲量や漁獲といった価値だけではなく、新たな価値の創造や、地球環境に対応した漁業を生み出すことにつながると述べた。



最後に竹下千代太社長から、株式会社天洋丸における取り組みについて講演していただいた。1947 年に、竹下社長の祖父が立ち上げた天洋丸は、現在橘湾内でまき網漁、養殖などを行っている。2001 年に、竹下社長が U ターンで天洋丸に戻って来た時、担い手不足という深刻な問題を抱えていた。そこで、新たな担い手を確保するために、2017 年から技能実習生としてインドネシア出身の漁師を受け入れ始めた。コロナ禍であ



った 2021 年には「一年漁師プロジェクト」を開始し、2024 年には様々な取り組みが評価され、N びか認定を受けた。このような取り組みの前進の背景には、これまでの水産業にはなかった改革があった。例えば、労働環境整備として労働時間の見直し、年間休日の設定、漁師体験の積極的受入れ、そして居住環境の整備として社員寮の建設である。インドネシア出身の漁師たちが安心して暮らすことができるようお祈りのスペースも確保されている。以上のような改革により、天洋丸ではさまざまな社員たちが個性や力を発揮している。インドネシア技能実習生たちは、雲仙市インドネシア料理研究会を発足させ、インドネシアの食文化を通じて地域の人と関わりを深め、「ニボサンバル」というヒット商品を生み出した。県外で働きリモート社員は、SNS などを用いた宣伝・広報活動や、オンライン上での様々な事務作業を担っている。さらに一年漁師として入った社員は、漁業とは異なる業界での経験(例えば、ラーメン屋社員、飲食店勤務)を活かしながら天洋丸での業務を行っている。またこの取り組みは女性が漁師の世界で働くきっかけともなり、天洋丸では女性漁師が働きやすいよう、船へのトイレの設置、生理休暇の有給化と日数の増加、就業規則の改訂などを行った。また本学の多文化社会学部出身の女性卒業生も一年漁師となり、語学のスキル等を生かしながら技能実習生のフォローや英語による天洋丸の情報発信などに取り組んだ。このように、一年漁師は天洋丸に新しい風をもたらしていた。

しかしこうした改革にも関わらず、必ずしも順風満帆とは言えない。不漁による資金不足は特に深刻な課題である。また多様なバックグラウンドを持つ人々が働くことにより、漁業の勤怠管理の難しさ、既存の就業規則とのズレ、価値観の世代間でのギャップによる人間関係といった問題も生じている。特に人間関係の問題に関して、竹下社長はアンコンシャス・バイアスが一つの要因となっていることを指摘した。こうした課題を解決するために、社会保険労務士との月 1 回の面談や、定期的な社員研修などを実施している。以上のことから、竹下社長は、水産現場でも時代の変化を受け止め、価値観・考え方の違うひとりひとりに寄り添う柔軟な対応が必要であることを述べた。また竹下社長は、天洋丸の取り組みは決して「成功事例」ではなく「もがきながら取り組んでいる現在進行形」の取り組みであるとも述べられた。

第 2 部 水産業における働き方の未来について考える

第 1 部での報告を踏まえて、異なる分野・立場の登壇者を迎えて議論を行った。まず第 2 部からの登壇である 3 名に自己紹介をしていただいた。多文化社会学部・細田尚美准教授からは、自身が研究し



ているアラブ首長国連邦の多文化共生の特徴について話されるとともに、多文化社会学部の学生たちと天洋丸を訪問し、実際に外国出身の漁師や 1 年漁師の先輩たちと交流したフィールドワークが写真とともに紹介された。次に長崎鶴洋高等学校水産科の荒川和美教諭からは生徒たちと食品開発に取り組む中で、環境問題の解決を試みたり、女性社長との出会いによって取り組みが成功したりした経験を紹介された。最後に大学院水産・環境科学総合研究科博士課程 2 年の山本悠理さんからは、自身の研究である養殖技術の開発に関して紹介があり、今後養殖業者の助けになる研究をしていきたいと述べられた。またこうした研究の背景に、漁港の近くで育ったこと経験があることも述べられた。さらに、第 1 部の登壇者である松下先生からは、第 1 部の感想として、予測が困難なこれからの社会の変化に対応していくためには、さまざまな人たちが知恵を出し合っていくことが大事だと思ったと述べられた。ディスカッションでは、高校生を対象にした人材育成の取り組みがあるかという会場の高校生からの質問に対して、広瀬准教授、山本さん、竹下社長がそれぞれの立場で取り組みを紹介した。さらに竹下社長からは、地方の一次産業の抱える課題として、若手の雇用の難しさ、漁業だけでは収入の確保が難しいことなどについての発言がなされた。そして細田准教授から竹下社長に、外国からの労働者が、組織の中だけではなく、地域の中で暮らしていくために大学生たちにできることは何かという質問がなされた。竹下社長は、外国からの労働者は単なる労働者として外国から来ている人ではなく、地域の中の生活者になっていること、外国からの漁師たちも一人ひとり全く異なる背景や個性を持っていることを話され、だからこそ色々な人たちが関わったり、理解したりすることが大事であると回答した。また荒川教諭からは、卒業生の中に水産業で働きたい女子生徒たちがいるが、受け入れる企業が少ない現実があるため水産業が変わっていく必要があるという指摘がなされ、天洋丸が若者たちの力を引き出す取り組みをしていることに対する期待が述べられた。最後に、山本さんから、自身の周りでも水産業に対するネガティブなイメージを持っている人が多いので、今回のようにダイバーシティの視点から水産業のさまざまな取り組みに触れ、そのようなイメージを払拭できればいいと思うという発言がなされた。

以上

